

目の前にいるのが夢でも妄想でも稱わない。

魅力的な彼女がどんな形であれ

事を感じずにはいられない

視

なんでもさしずつ打ち解け

ているようで嬉しくもあり、もどかしくもあり

ただ話をする時間がなんとも楽しく感じられ

ルナ先生と 3日間

セクシーと
出れない
部屋?!!!

ルナ先生と3日間
く Hしないと出られない部屋
く

【1日目】

『うっ……、イタタタ……』

おかしな姿勢で寝ていたせいだろうか。

起き上がろうとすると身体のあちこちからきしむように悲鳴が上がる。

それもそのはず。どうやらお世辞にも就寝に向いているとは言えなさそうな小ぶりのソファーに寝かされていたらしい。

見覚えのないソファーに見覚えのない部屋。

違和感しかない光景に寝ぼけているだけと信じたいが意識はすでにハッキリしている。

ざっと見渡した感じでは程よくこざっぱりと整えられてこそいるものの、家具家電も少な

く生活するには物足りなさそうな空間だ。

言うなれば中堅のビジネスホテルといった印象だろうか。

まあそれも部屋の大部分を占拠しているやたらに立派なベッドを除けば、の話のだが。

普段シングルで寝ているせいもあってやたら巨大に見えるそれはキングサイズベッドというやつなのだろう。

同僚のやたらとガタイばかり良い男を二人横に並べたとしてもなお余りそうな寝台には真っ白なシートとカバーがたっぷりと掛けられている。

だが、そこにいたのがガタイの良い男などではないところがある意味最大の問題だった。

清潔そうなシートの向こうに丸みを帯びた肩と長い髪が見えているのに気づいた時はあやうく腰を抜かしかけてしまったほどだ。

今のところ部屋の中に時計は見当たらないが、まだ早い時間だと思われる。

シーツの隙間からこぼれた絹糸のような金色の髪に午前中を思わせる白っぽい光が淡く差し掛かっている様子はそこだけ切り取ればどこか長閑（のどか）ですらあった。

ー どうやらベッドで眠っているのは若い女性らしい。

顔こそよく見えないが軽く握った白い手を頬のあたりに添えて眠っている姿がなんとほなしに微笑ましい。

しかしどう考えても知り合いにこんな若い女性――しかもこんな見事な金髪の――などいない上にそもそも昨日は間違ひなく自宅で眠りについたはずなのに。

だが、空腹とわずかな尿意、なんならオマケに首の痛みをつけてやってもいい。

そんな様々な事象がこれが現実であることを示していた。

考えても仕方なさそうなので痛む首をひねりながらできるだけ物音を立てずに室内を調べ
てみることにする。

なにせ事情もわからないのに見知らぬ女性が起きて騒ぎ始めてはコトだ。

ひとまず状況だけでも把握しなければ…。

しかし頼みの綱のスマートフォンは手元にないし、ホテルのような部屋の見た目にしては
フロントに繋げるための電話がない。

窓にしたって高い位置に横長のガラスが設置されてはいるものの、出入りはおろか開閉す
らできないハメ殺し仕様ときたものだ。

空と光の様子から察するにこの部屋はかなりの高層階に位置しているらしいという程度の

見当はついたもののそんなのは何の役にも立ちそうにない。

妙に閉鎖的な印象からどことなく期待するだけ無駄といった雰囲気は感じていたが、出入りの可能性が残されたドアは予想通り固く閉ざされていた。

外側から鍵を掛けられたと仮定するにしてもわずかなガタつきすらないドアレバーの違和感も拭えない。(普通ドアというのは鍵の仕組みから言って必ず多少のアソビがあるものだ)

これではまるで寝ている間に世界の時が止まったのではないかと疑いたくなるほどだ。

大声を出してドアを叩いてみたい気持ちはあったが、いかんせんベッドにいる女性のこと
が気にかかる。

混乱する頭を抱えながら当面のなすすべを失った私は元のらソファアーにどかっと座り込
だ。

目の前のカフェテーブルには500mlの水のペットボトルが2本、それに灰皿と黒い無地のライターが添えてある。

見知らぬ女性と二人、これじゃあまるでラブホテルみたいじゃないか…。

喫煙の習慣はなくなっていたが口さみしさを感じてペットボトルの蓋をむしり取る。

数口飲んだところで緊張していた身体が忘れていた尿意を呼び起こしてしまったようだ。

バスやトイレはどうせ一体型だろうと思って排泄ついでに覗いてみると意外にもそれぞれが独立していたのはおろか、大型の浴槽は全身を伸ばす余裕すらありそうで驚いた。

さて。眠っている女性が起きてしまうかも知れないが、だからといっていつまでも我慢する訳にもいかないので仕方ない。

長く眠ったせいでやたらと時間のかかる排泄を終えて洗面台で手を洗い、白く畳まれたタ

オルで水滴を拭き取る。

そっとドアを開けて元の部屋に戻ると、布団を掛けたまま半身を起こした女性と目が合った。

どうやら訳のわからない状況なのはお互い様らしい。

この女性が何か知っているかもしれないというわずかな期待もあつたが、あきらかに困惑した彼女の表情からはさっきの自分と同じ混乱の中にいるのだとすぐに察しがついた。

「あ、あの…、わたし……」

言葉に詰まってしまふ気持ちはよくわかる。

取り乱して叫ばれる事も覚悟していたので、むしろ幾分おっとりした彼女の反応はありがたいとすら感じられた。

それにしても、だ。

若い女性だとは思っていたが、年齢でいえば二十歳くらいだろうか。

よく寝たせいか生来のものかは知らないが、透けるような白肌に金色の髪がサラサラと流れる様子はいつまでも見ていたいような美しさがある。

人懐っこそうな丸い目元とわずかに深い青みをたたえた大きな瞳、そして周囲を縁取っている長いまつ毛。

小さく可愛らしい口元を物言いたげに軽く開いた彼女と私はしばらく見つめ合っていた。

『あの、えっと、訳がわからないとは思いますが私も起きたらここにいて…調べてみたんですがドアも開かないみたいなんですよ』

説明のしようがないのでとりあえずわかった事だけを伝えてみると、固まっていた彼女が口元に手を当ててオロオロし始めた。

「えっ…、そんな…。わたしも昨日は確かに自分の部屋で寝たはずなんですけど…、ど、ど、どうしましょう?！」

しばらくキョロキョロと見回してから自分でも出入り口を確かめてみようと思ったのだろうか、布団をめくって床に白い両脚を下ろしたところで悲鳴が上がる。

「きゃあああっ///////」

彼女が慌てて掛け布団を引き上げる前に見えた光景が網膜に焼きついたように離れない。

薄い素材のキャミソールから透けて見える果実のようなバスタの深い谷間とそれを包む白いブラジャー。

クッキリとくびれた腰：お揃いのショーツが少し食い込むくらいにむちむちとした肉感をたたえた尻からカーブを描いて続く太腿の曲線。

上方から差し込む柔らかな光に照らされた彼女の身体は優美な女性のたおやかさを絵にしたような美しさをたたえていた。

『う、うわああっ、すっ、すみません！』

別にわざと見た訳でもないのだが、反射的に謝りの言葉を口にして後ろ向きになって目を閉じる。

悪気はないが今見たばかりの可憐な下着姿が脳裏に浮かんでくる事については不可抗力として許して頂きたいところだ。

「あっ…いえ…、こちらこそすみません…なんだか状況は良くわかりませんがとりあえず同じ部屋に来ちゃったという事なんでしょうか…。あつ、えっと、わたし…『葉月ルナ』

と申します。よろしく願います」

有事の際には女性の方が落ち着いているという説を聞いたこともある気がするが、年下の彼女のほうがしっかりしているようで慌てすぎた自分が少々恥ずかしくもある。

だが。

そんな事よりも、「葉月ルナ」だって？

聞き間違えか、盛大なドッキリでからかわれているのだろうか。

少年の頃に夢中で読んだ漫画に出てきた憧れの女性と同じ名前、しかも金色の髪に肉感的なあの肢体……。

不思議な部屋に閉じ込められたのは勿論深刻な問題だが、今は葉月ルナと名乗る彼女の存在に夢と現実が入り混じった世界で頭を強く殴られたような衝撃を受けている。

「あの…、だいじょうぶ、ですか？」

シーツを巻き付けた彼女が鈴の鳴るような声で話しかけつつ心配げにこちらを伺っている。

『あ、ああ、すみません。慣れないところに寝かされていたものですから…少しぼうつとしてしまったようです』

小さめのソファアーを見やりながら言い訳をすると、「ああっ、ごめんなさい！私が占領しちゃってみたいで…」と申し訳なさそうな彼女の声にする。

彼女のせいでもないのにこんな状況でも怒ったり泣いたりするより先に見知らぬ男を気遣ってくれる優しさはまるで想像や妄想の中の「あの女性」のようだ。

『えっと、もし良かったらこれでも…』

クローゼットにあったバスローブを後ろ向きのまま手渡すと、遠慮がちに「ありがとうございます」という声が聞こえてきた。

「……………着てみました。だいじょうぶ…、です……………」

消え入りそうな声に振り向くと白いローブを羽織った彼女がベッド脇に立っている。

本来なら膝丈ほどあるバスローブのはずだが、豊かなバストとヒップが盛り上がってしまいうせいで丈が上がってしまうのか健康的な太腿が半分ほども露わになっている。

その上、ローブではしまい切れないとでも言うように深い谷間がV字に切れ込んだ合わせ目からくつきりと姿を現していてどうあがいても目のやり場に困ってしまう。

『えっと、じゃあ改めまして…。私は〇〇と言います。ごく普通の勤め人であやしい者ではありません。正直何が起こっているのかわかりませんが、なんとか一緒に解決しましょう』

どうせなら彼女に少しでも信頼してもらいたいという気持ちからねかなしの冷静さを演出するべく仕事モードの自分を引っ張り出して挨拶してみる。

「どうやらこれで正解だったようだ。自己紹介をした事で彼女が少しホッとした笑顔を見せてくれたことにこちらも安心した。」

音を気にして開けていなかった冷蔵庫を確認すると数日分はありそうな簡単な食料と水、それに酒なども入っているようだ。

当面の飲食物がある事に安心して未開封のペットボトルを彼女に手渡すと、「ドアを確認するので少しうるさくなりますが我慢して下さいね」と丁寧に伝えて再び入口に向かう。

ドンドンドンドン！

『誰かいますかー！ドアが開かないのですが！』

ドンドンドン！、ドンドンドン！……

しばらく呼びかけてみたがこれでは手が痛くなるばかりだ。

念のためクローゼットにあった木製のシューズブラシで再びドアや隣室（というものがあ
るのかは知らないが）を叩いてみてもこれといった反応はない。

「やっぱりダメそうですか？」

気遣わしげな視線を投げていた彼女が話しかけてくる。

さりげなく谷間を隠そうとしながら上目遣いでこちらを見つめる彼女の姿にこんな時だと
いうのに少年に戻ったような感情が湧いてきてついドギマギしてしまいそうだ。

『残念ですが外部と連絡を取れそうな感じはないですね。でも私達の姿が見えないことで捜
索をする人間もいるはずですよ。だから今は……そうですね、いっそ腹ごしらえでもしません

か？
』

閉じ込められたとわかった以上、まずは空腹を満たしつつ話してもしようと思いついた。

いや、率直に言うならば彼女の事をもっと知りたいという方が本音だろうか。

なんなら今誰かが「助けに来たぞ」とドアを開けてくれたら少しだけ恨んでしまいかねない
自分がある事も否定できない。

「…ええ、そうですね。ハラが減っては戦もできぬ、って言いますし！」

それなりにお腹が空いていたのか、それとも元来からほがらかな性格なのか。

不安だっただろうに、胸の前でグーのポーズをしながら古めかしいことわざを繰り返す彼女の健気な様子になぜかこちらが励まされる。

棚に置かれていたパンの期限を確かめてから冷蔵庫で見つけたハムとパックのオレンジジュースを添えて差し出すと、風呂上がりさながらの格好の彼女がとうございと丁寧にお礼の言葉を口にする。

「あの…、半分こ、しませんか？」

そう言うと丸いパンを器用に半分にしてこちらに差し出しているのは限りある食糧を節約しようと言うことか。

なるほどと合点して受け取ったパンにハムを挟み、さっき知り合ったばかりの彼女とソファで肩を寄せ合って食事をしているのは随分と不思議な気持ちができるものだ。

パンをあらかた口にし終えた彼女がパックのジュースにストローを刺してこちらに渡そうとするのを制して『私はいいから、葉月さんどうぞ』と言うと可愛らしい唇をすぼめてチュウッと吸い上げる様子がなんだか小動物みたいで愛らしい。

「はい、俺さんもちゃんと飲んで下さいね。オレンジジュースにはビタミンやカリウムがあまりますから♪」

律儀に半分ほど残したジュースを手に持たせてくれるのは優しさか天然か。

間接キス、なんて言ったら古いだろうか。いや…、今時の子はそんなの気にしないか…。

ぼんやりとそんな事を考えつつも一人勝手にドキドキしてしまう自分の心がまるでどんどん少年に戻っていくような感覚になる。

ジュースなんて滅多に飲む事はないのだが、パクリ、と細いストローを啜えてから吸い上げると甘酸っぱい果汁の味が溢れてきた。

「……あゝ…!!!」

こちらがストローに口をつけるのと同時に彼女がハツとしたように口元を抑えて顔を赤ら

めるのが横目に見えた。

「…すっ…すみませんっ…!!」
「間接キス…させちゃいました…?」

消え入りそうな声でアワアワする様子に思わずジュースを吹き出しそうになる。

しっかりしているのか天然なのかは置いておくとしても、彼女がとてもかわいらしい人なのは間違いないさそうだ。

『私は全然大丈夫ですよ。逆になんだか気を遣わせちゃってすみません』

照れ隠しに頭を掻きながらそう言うと、ペロリと舌をのぞかせた彼女が「わたしは塾で数学の教師をしているんですけど、たまに天然って言われる事があった。抜けてるところがあったらごめんなさい」といって軽く頭を下げて見せる。

やはり数学教師か……。もしかして…という思いは早くも願望を孕んだ確信に近づいて

いた。

— 葉月ルナ —

目の前にいるのが夢でも妄想でも構わない。

魅力的な彼女がどんな形であれ隣にいる事を感じせずにはいられない。

「ごちそうさまでした♪」

簡素な食事ではあるがひとまず空腹を回避した彼女は手際よくテーブルの片付けを終え、そして今は身を隠そうとしてさんざん引っ張り上げたせいで乱れた掛け布団を直そうと奮闘している。

小柄さと豊かさが絶妙なバランスを保っている彼女の身長は…おそらく160cmあるかなにかといった感じだろうか。

普通のベッドの倍以上ありそうな布団を整えようと悪戦苦闘する様子に手を貸そうと近づいたその時、一枚のメモがはらりと床に落ちてきた。

『なんだこれは？えつと……、ご当選おめでとうございます。ここは………?!?!?!』

白い紙に書かれた文面を読み上げようとして言葉に詰まったのも無理はない。

当選おめでとうございます。

ここはセックスをしないと出られない部屋です。

3日間相当の食品を用意しておりますので

ご自由にお楽しみ下さい。

なお、日数が経過した場合でも食料の補充はなく、

外部との連絡も認められません。

何かに応募した覚えもないし、悪ふざけとしか思えないが確かに食料を見た時に3日ほど持つだろうと思っただのは事実だった。

「あの、どうかされました？その紙に何か……」

こちらの腕から顔を覗かせるように近づいてきて紙片を眺めた彼女が言葉尻を失ったまま顔を真っ赤に染めている。

『……、こんなの悪ふざけか何かですよきつと。というか、あの、誤解がないように言っておきたいんですが私は別におかしなものに応募した覚えは一切ないです!!!! ホントにそこだけは信じてくださいっ!!!!』

必死に弁明すると、困ったような八の字眉毛をした彼女がこちらを伺うように暫く見つめている。そして、深く呼吸をしてから口を開いた。

「……そうですよね。きっと私達は何かの手違いで巻き込まれただけなんじゃないでしょうか。あの……こんな事を言うのも変なんですけど、なんだか俺さんとは初めて会った感じがしないんです。もちろん見た目やお名前を知っていた訳ではないんですけど、どうしてだかずっと昔から知っているような……きっと悪い方じゃないって、そんな気がするんです」

思わず『俺こそ昔から知ってるよ』と口から出かけた言葉をグッと飲み込んで『葉月さん、ありがとう。そう言ってもらえると有難いし、実は私もそう思っていたんです。以前から知っているような……』と告げてみる。

「ええ……。この紙がなんだかよくわからないですけど、とりあえず暫くは出られそうにもないですし……。だから、どうぞよろしくお願いします。あと、私の事は葉月さんではなくて遠慮なく名前で呼んでくださいね」

『ああ……。わかりました。ルナ……さん……？ いや、なんかしっくり来ないな……。あの、もし良かったら“ルナ先生”って呼んでもいいですか？』

「えっ？どうしてその呼び名を？ やっぱり知り合いみたいで不思議ですね。いつも皆からそう呼ばれてるので一番落ち着くんですけど、俺さんみたいな大人の方に先生って呼ばれるのも変かかって思っ。でも良かったです。改めてよろしくお願いします♪」

葉月さんと呼ぶたびに感じていた違和感が解消されてスッキリしたのは互いに同じだったようだ。

顔を見合わせて微笑んでいると、面倒な事態に巻き込まれているのも忘れてほっこりとした気持ちにすらなってくるのが不思議だった。

そのあとも定期的にドアを叩いてみたりスマホを窓に近づけたりと色々な努力をしてみたのだが、やはり結果に変わりはなかった。

しかし、なんとか顔には出さないように努力してはいるが個人的には先程の紙に書かれた内容が気になって仕方ない。

一瞬見てしまったルナ先生の下着姿と「セックスをしないと出られない部屋」という強烈な文面が壊れた蛍光灯みたいに頭の中で交互に明滅するのを止められないのだ。

それでもやる事がなくなってソファァーに横たわって考え事をしているうちに少しの間眠っていたらしい。

しばらくして目を覚ますと、ルナ先生は備え付けの便箋になにやら熱心に書き付けていた。

聞けばこれからの授業計画レポートの草案を作成しているという。

丸っこいメガネ（昨晚メガネを掛けたまま寝落ちてしまったのだろう）を掛けて机に向かう横顔は真剣で、さっきまでのホンワカとした印象とはまた違う一面を垣間見たようでドキッとす。

「少し眠れましたか？ベッドを使えば良かったのに……気づいた時には眠っていたようで声を掛け損ねちゃいました」

気に掛けてもらった礼を言おうと口を開くが、エアコンの風が直撃していたらしく喉がガサガサと痛んで声が出にくい。

ゲホッ、ゴホッ、

大きめの咳から立て続けに咳き込むと、心配そうな表情を一段階深めたルナ先生が近づいてきた。

「大丈夫ですか？どこかお加減が悪いのかしら…」

上半身を屈めてこちらの顔色を覗きこみ、額に柔らかな掌を載せながら自分のおでこと比べている。

「熱は…あまりないみたいですね」

額に手を添えたまま呟く彼女の優しさに感じ入る反面、目の前で重たげに揺れる谷間の迫りに気圧されてもいた。

(一度でいいから触れてみたい……)

男なら誰もがそう思っても仕方ない事だと言いつくす。

イガイガする喉が焦りにも似た苛立ちを呼び起こしている気がして落ち着かない。

ズンズンッ……!!

またひとつ咳払いをすると心配そうな瞳にぶつかる。

(もしも…万が一彼女と触れ合うチャンスがあったとして、風邪と思われていたら不利じゃないか…?!)

妄想と打算が入り交じった感情が渦巻いたその時、気づいたらスルスルと勝手に言葉が溢れ出していた。

『いやあ、実はちょっとした持病がありましたね。時々こんな風に咳き込んでしまうんです。発作を抑える薬がここにはないので…心配をお掛けしてすみません』

ちょっとした出来心で出まかせを言ってしまったが、子供の頃に喘息だったから持病があるのは嘘じゃない…と屁理屈をこねて自分の中で処理をする。

『そう…だったんですか…。お薬がないのでは困りますよね…』

本当に困ったという表情をしてくれる彼女への罪悪感と、柔らかそうな肌に手を伸ばしたくなる衝動がぐるぐると混じり合う。

こちらのそんな気持ちも知らずに落ち着かない様子でベッドに腰を降ろした彼女は眉根を寄せて考え込んでいるようだった。

『お先で申し訳ないけれど湿気があれば咳も落ち着くと思うのでちょっとシャワーを浴びさせてもらいますね』

なんだか居たたまれない上にこのままでは更に彼女に触れたくなくなってしまいそうで逃げよう風に風呂場にこもる。

熱いシャワーが緊張でにじんだ汗と衝動を洗い流してくれることを期待して。

ザバザバと湯を浴びていると多少はサッパリした気分になってきた。

どうにか建て直したところで、入るかはわからないがルナ先生のために湯でも張ってみようと思いついた。

いきなり狭い部屋で知らない男と顔を付き合っているより一人の時間があつた方がまだ気休めになるだろう。

バスタブをざっと流し、適温を探りながら湯をためていく。

(…彼女はここでどんな姿に……)

せっかくサッパリしたのにまたおかしな事を考えそうになる自分を戒めるように頭に水を浴びせて冷静になれと言い聞かせる。

ふかふかのタオルを掴み取り、わしゃわしゃと闇雲に腕を動かす。

まるで邪念ごと拭いてしまおうとするみたいに。

『ルナ先生、広いバスタブが思ったより立派なのでお湯を張ってみたのですがもし良かったらどうですか？』

まだどことなく浮かない顔をしているように見えるのは気のせいだろうか。

「ありがとうございます。ありがとうございます。そうですね…せっかくなので入らせてもらいますね」
気弱な笑顔で礼を言いながら洗面室へと消えてゆく彼女をビールのプルタブを押し上げながら見送った。



「ああ…、どうしたらいいのかしら………」

洗い髪を巻き上げて湯船に身体を浸しながら呟く。

今日は随分と寝心地がいいわなんて思いながら目を覚ましたら全然違う場所に居るなんて。

そんな事ってあるかしら。

当面の食事はあるようだけど、そんなの何の解決にもならないし。ああ困ったわ…。

俺さんの言う通り、誰かが探し始めてくれていれば良いのだけど。

そう。それに問題は…俺さんの事よね…。

良い人そうので安心したけれど、さっきの咳き込みようは心配だわね。

ご病気があるって言ってたけれど大丈夫かしら…。

一番気にかかるのはここには発作を抑える薬がないって言ってた事かしら。

【部屋から出られない ↓ 発作が起きる ↓ 薬がない ↓ 死】

……なんて事になったら… ああっ、どうしましょう…

発作が起きる前に外に出してあげたいけどメモの内容は本当なのかしら…

そんな…、まさか……、でも……
//////

♡
♡
♡
♡
♡
♡
♡
♡

どうやらゆっくりと湯に浸かっているらしい。

しばらく鳴っていたシャワーの音もいつしか止み、それからまた時間が経ったように思う。

できる事なら長風呂の理由がこちらと顔を合わす時間を少しでも削るためではなく、心を落ち着けるためのリラックスタイムだと信じたいところだ。

まあ彼女ほどの見事なロングヘアならそれなりの時間が掛かるのも当然だろうがあまり長いこと静かだと心配になってくるな…。

かと言ってまさか浴室のドアを開ける訳にはいかないし声を掛けるのすら憚られる。

女性と二人きり突然知らぬ部屋に閉じ込められてただでさえ落ち着かないというのに、何とはなしに彼女が風呂から出てくるのを待っているような形になってヤキモキするのも仕方ない。

……そもそも自分が思うほどには時間など経っていないのかも知れない。

ほんの数歩の距離に彼女——あのルナ先生——が入浴していると思うと無性に落ち着かないせいでろう。

グルグル回る思考の中でさっき見えてしまった下着姿は勿論のこと、水の滴る身体に濡れ髪をまとわせたあらぬ姿までも想像しそうになっては慌てて頭を振って妄想を追い払う。

…それにしても、この紙は一体。

“セックスしないと出られない部屋”？

そんな話があるだろうか。

でも、もし、これが本当なら……………？

つまんだ紙片を眺めながらぬるくなったビールをまた一口流し込む。

やがて物音が聞こえてきて、ドアの向こうの彼女が無事に長いバスタイムを終えた事にほっとする。

そこから更に永遠のごとくドライヤーの音が続いていたが、それが途絶えると再び静寂が訪れる。

「お風呂、ありがとうございました」

洗面まわりとメインルームをつなぐドアが開くと同時に彼女の声が聞こえてきた。

別に俺の風呂じゃないんだから挨拶なんて要らないが…ああ、もしかして湯を張っておい

た事へのお礼だろうか？

こんな言い方はよくないが性差だ権利だと声高になってきた近年はいわゆる感じの良い女性が昔より少なくなったように思っていたが…。

思わぬところで伺える彼女のこまやかな性格にひそかな感銘を受けながらソファアの隣をいそいそと空ける。

『良かったらルナ先生も一本どうですか？結構種類がありましたよ』

美女を相手に昼から飲むなんてなかなかオツじゃないか。

この状況が本物だと云うなら時間はまだ沢山あるし、多少気持ちが悪く落ち着いたところで彼女の話なんかも聞いてみたい。

そんな風で一人で舞い上がっているこちらをよそに彼女は少し迷っているように見える。

『ああ、すみません！酒は苦手でしたか？それとも飲食物の消費が気になるとか…』

「いえ、そうじゃないんです。……そうですね、せっかくですし…飲んじゃいましょうか♪」
なかが折角だかよくわからないが思い切ったような明るい表情にひとまず安堵といったところだろうか。

二人で顔を並べて冷蔵庫をのぞき込み、彼女はピーチ味のチューハイ・カクテルを、そしてこちらはハイボールをそれぞれ選んではソファアに並んだ。

『カンパニー！』

「いただきまあーす♪」

プシュッ！と爽快な音を立てて開けた液体をグラスに注いでカチリと合わせるとなんだか久々に楽しい気持ちになってくる。

こんな状況で呑気かも知れないが、こんな状況だから彼女とも出会えたのだろうと思うと神だか悪魔だか知らぬがこの天から降ってきた采配に感謝の念すら湧いてくる。

チラリと横を向けばバスローブ姿の彼女がジュースのように甘そうな酒を啜っている。

『ルナ先生は毎日塾にお勤めなんですか?』

無難なところから尋ねてみると、しとやかな手指をグラスに添えたまま笑みをたたえた丸い瞳がこちらを向く。

「いえ、実はわたしはまだ音羽女子大の学生で、塾はアルバイトで週に何日か通っています。もう単位はほとんど取り終えているので割と自由がきくんです」

『へえ〜?! そうなんですか。学びながら子供達にも教えているなんてすごいですね!』

ロープから覗く谷間は気になるが、やはりルナ先生は女子大生だったかという感慨に耽けつつ相槌を打っておく。

「ところであの…、敬語はやめにしませんか？私なら気軽に話して頂いて大丈夫ですし♪」
『いや、貴女がとても丁寧なのでつい同じように敬語になっちゃうんですよ…あ！、それじゃあどちらも敬語ナシっていうのはどうですか？…じゃないか、えっと、…どう？』
もっとくだけて話せるようにそんな提案をしてみると、はにかんだような彼女がコクリと頷いている。

なんだか少しずつ打ち解けられているようで嬉しくもあり、もどかしくもあり。

ただ話をする時間がなんとも楽しく感じられる、そんな気持ちは久しぶりだった。

しかしこのソファアーの場所はイマイちらしい。楽しく喋っているのはいいが、ここのエア

コン直撃はどうも喉に来る。

『単位をほぼ取ったってことは…ゴホンっ、失礼。今は二十歳を過ぎたくらいかな?』

「ええ、二十二歳ですけど…大丈夫ですか?」

言葉遣いが丁寧なのはもともととのクセだろうか。また敬語だったがこれはこれで良いから特に指摘はしないでおこう。

そんな事を考えながらもひとしきり咳き込んでしまっているのを彼女が心配そうに見守っている。

「お辛くないですか?心配だわ…」

呟くようにそう言いながら背中を撫でてくれる手は優しく温かい。

『ああ、ありがとう。ノドの調子が悪いだけで全然どこも悪くないんだ。だから大丈夫』

本当の事を言ってみたが、優しい彼女は心配そうな表情でまた顔を曇らせている。

「あの…、わたしお風呂で考えてたんですけど…、もしこのままお薬がなかったら困りますよね…。だから、わたし、あの……………///////」

いつの間にもろ酔いになっていたのか、真っ赤な顔をしながら聞き取れないくらい小さな声で話し始めた彼女。

もっとよくその声を聞き取ろうとしたその時。

「……………クス…、してみませんか……………」

え、いま、なんて……？

時が止まったように身動きできず、それでいて全身の血液が沸騰してしまいそうな程に心臓が高鳴る。

「あの、ですから……
わたしで…、よければ……
」

ポツと赤らんだ瞳とちゆるんと濡れた唇がこちらを見上げている。

…う、嘘だろ？ 本当に言ってるのか……？

思いがけない発言に戸惑う心と、この申し出を断る事なんて絶対に出来ない衝動：

そもそも期待してたのは自分じゃないか：まさか彼女から言い出すなんて?!

まるで初めての女性を前にした少年のように混乱している目の前で、ルナ先生がするりとバスローブを肩から落としていく。

その下から現れたのはかわいらしい前ボタンのキャミソール。

さっき身につけていたのと似たような、ブラジャーが透けるデザインが悩ましい。

「不思議ですよね、下着が置いてあるなんて思わなかったですけど…」

照れ隠しのように呟く彼女の一举一動を、恥ずかしそうでいて大胆なその姿を：余す事なく記憶したくて、触れたくて、口も目も開いたまま手だけが勝手に伸びてゆく。

「あっ………// は…、 恥ずかしいから、 後ろから………//」

つと後ろを向く彼女の丸い肩と薄布から透ける白い肌、そしてスツと線の入った背中。滑らかな肌を目前にして手を伸ばすのを止める事など出来るはずがなかった。

何も考えられず衝動に任せて手探りでボタンを探していると、ふにゅん…と柔らかかなふくらみに手が触れる。

「あ………//」

すっ、すみません、と咄嗟に謝りながらも憧れの胸に触れた事への感動を禁じ得ない。

夢中で身体の中央あたりをまさぐるとボタンらしきものにたどりつく。

『外し、ますよ……?』

信じられない気持ちのままそう問うと、金色の髪がコクリ、と揺れる。

ゴソゴソ、モゾモゾ…

おもちゃのように小さなボタンはなかなか外れてくれない。

「…んっ………くすぐったい………」

可愛らしく呟いて身をくねらす姿が大きな影になって揺らめいているのがまるで夢の世界に紛れこんだような錯覚を起こしそうだ。

『下も…外しちゃいますよ…』

そう言いながらいくつかのボタンを外してゆく。

よし、あとは…

「あ…あ…っ…!!!」

深い胸の谷間に入り込んだボタンを探すだけで吐息を漏らしていく彼女の様子がなまめかしい。

(ここを…外したら…)

ぴらっ…

胸元を繋ぎ止めていた最後のボタンを外すと半透明の布が肩口を滑り落ちていった。

「あんっ…!!!」

改めてブラジャー姿の背中を眺めて気づいたのだが、こちら側にホックが見当たらないと

いう事は…

触れただけでぴくんと震えた肩から、ジワリと手のひらを前側へと降ろして胸のあたりをまさぐっていく。

「はあ…んっ……!!!」

モゾモゾとブラジャーの上を這う指先に反応しているのかと思うとそれだけでたまらない。双つの丘の深い谷間の奥にやっとなぞり当てたフロントホックと素肌の間指先をねじ込むと、「ああっ…!!」と小さく上げた声が耳のすぐ側を甘くくすぐっていく。

／ふちんっ／

金具が外れると同時に重量感のある胸が解き放たれていくのがスローモーションのように目に映る。

後ろからボタンを外すといつてもつい抗えず少し身を乗り出してしまったのは男の性だと
言わせて欲しい。

ぶるるるるるんっ♪

いきなり放たれた反動で白い山がぶるぶると何度も揺れているのが見てとれるが、位置の
関係で先端までは見えないのがたまらなくもどかしい。

さっきまで和やかに話をしていたのに…今や彼女がショーツ一枚になっていゝなんてとて
もじゃないが信じられない。

夢見心地の視線を戻すと、背中を向けたままの彼女が片手で器用に両方の胸の先を隠しな
がらわずかにお尻を持ち上げている。

「はい……、どうぞ……………//」

白いレースがむちっと食い込んだサイドも美味しそうだし、丸くかわいらしいお尻をソファァーから浮かせてこちらに差し出しているエッチな体勢ときたら！

(う、うそだろー！！脱がしていいのか！？)

それこそ目玉が飛び出しそうになりながらショーツの上側に人差し指を差し入れる。

「きゃんっ///////」

半裸姿で片手だけをついたグラビアのようなポーズのままピクンと跳ねる様子を眺めつつ、尻の割れ目に沿うようにジリジリと指を引き下げていく。

「いっっ、イヤァァんっ……///////」

驚かせないようにじっくりショーツを下ろしたのが逆にくすぐったいのか恥ずかしかった

のか。

急にジタバタし始めたルナ先生がペタンと尻をつくくと、ショーツの中の手が下敷きになってしまった。

『うわああっ?!』

手の甲に密着しているむにゅっとした感触……。こ、ここってまさか、…まさかだよな……。期せずしてアブナイ場所に触れたまま時間が止まったように二人とも動けない。

「いやああん恥ずかしい…!!!」

クスンと鼻声になってしまったルナ先生のお尻からどうにか手を引き抜いて（おなごり惜しや…と思ったのは内緒）そりゃやっぱ無理だよなあという諦めにも似た気持ちかごんよりと渦を巻く。

ケホッ…、コホン…

バツの悪さから急にノドのイガイガを思い出して咳払いをすると、涙目の彼女が肩越しに振り返ってこちらを見ている。

「ご、ごめんなさい…。初めてだから緊張してしまっ…」

口元に手を当てて頬を染める様子にこちらが度肝を抜かれてしまう。

『は、初めて?!…そ、そうか、そうだよな…ルナ先生ってやっぱりそうなのか…』

頭に血が昇ってこちらも無意識にブツブツとつぶやきながら混乱してしま…

「でも、大丈夫ですから…。続けて、ください…」

ポツと頬を染めて俯く可憐な横顔と憂いを帯びた瞳…。

きっと今ごろ、わたしが頑張らなきゃ…、なんて考えているのかと思うとたまらなくじらしい。

『いいんですか…？本当にこのまま続けても…』

ダメと言われても襲い掛かりたくなるほど美味しそうな肢体と儂げな表情を目前に、けなしの理性をありったけかき集めて問いかける。

コクリ……

唇に手を当てて恥ずかしそうに頷くと、丸っこい肩をサラリと細い髪が撫でていく。

そうか…、それならば………

俯いている彼女の首と膝上に手を差し込んでえいっと持ち上げる。

本当なら顔色一つ変えずにサッと立ち上がりたところだが、どうにか腰が保っているだけでも褒めてほしい。

大柄ではないものの見事な巨乳とむちむちヒップの肉感的な身体を持ち上げてベッドへと近づいてゆくと下から彼女が驚いたように見上げてくる。

「わああ……すごい…！だ、大丈夫ですか？」

お嬢さん抱っこをされている側に氣遣われるとは情けないが、なんとか巨大なベッドの中心に降ろすことができたようだ。

『やっぱり、ベッドのほうが、いいかと思って…』

ほんの数メートルだったのに息を切らせているのが恥ずかしい。ちょっと張り切りすぎて

しまっただろうか。

「ふふっ///俺さんって…やっぱり優しいんですね」

胸を隠したままクスクスと笑う彼女の声にこちらの緊張がほぐれていく気がしたのはほんの一瞬だった。

互いの密かな笑い声が止むと、静寂がまた訪れる。

「えっと…///」

『あの…』

二人同時に口を開いて、二人同時に口をつぐむ。

彼女が何を言おうとしたのか気になって待っていると、おずおずと開いた唇からそつと言

葉がこぼれてくる。

「……………恥ずかしいから……………、脱がせて……………」

消え入りそうな眩きにまた一気に全身の血が騒ぎ立てる。

『そ、それじゃあ失礼して……………』

仰向けに寝ている彼女を前にして、ゴクリと喉を鳴らしながら改めてショーツの両端に指をからめる。

スツ……………ズリっ……………

ゆっくりショーツを引き下ろしていくたびにキメ細かい素肌の面積がじわりじわりと増えてゆく。

「……………ああっ……………」

ふっくらと小さく盛り上がったかわいらしい三角の丘がもうすぐその全てを晒そうとして
いる。

「……………」

ペロン、とショーツをめくるとぷくりとした恥丘と控えめな割れ目が顔を出しているのが
卑猥にも美しい。

おそらく元から毛がほとんどないのだろう。

ほわほわとしたわずかな産毛に覆われただけの恥丘は子供のようなのに、丸みを帯びた肢
体はどこをとつてもたわわに成熟しているというアンバランスさもたまらない。

真っ赤な顔を覆って身をよじっている姿があまりにも可愛らしくて目に焼き付けようと眺

めるのだが、強いて言うならおっぱいの先端が肘で隠れているのが惜しいところだ。

いま脱がせたばかりの丘のふくらみをつついてみたい衝動を抑えながら更にショーツを降ろしてゆく。

太腿を左右交互に滑らせるようにズリっ、ズリッ…と布を下げていくたびに微妙に脚を浮かせる仕草をしてくれているように思うのはおめでたい錯覚だろうか。

“かわいいあんよ”から丁寧につま先までショーツを抜き取ると、ついに一糸まとわぬ裸体になったルナ先生が横たわっている。

『ああ…す、すごい…』

「そ、そんなに見ないで…///////」

両手で胸を覆ったまま顔をわずかに横に逸らしている彼女の色っぽい姿に我を失いかけそ

うになる。

『いや…、見ます…。いいですか……?』

困ったように閉じた目を承諾ととらえて細い手首を掴むと、そっと外側へと開かせてゆく。右手を彼女の顔の横に置き、それから、左手を……

「……んっ… やあ……っ…」

さつきから覆われていた二つの先端が恥ずかしそうにふるふると空気に晒されていた。薄桃色のかわいらしい実のような乳首が目の先で誘うように揺れている。

『すごく、可愛い……』

思考能力が著しく低下しているのか、語彙というものが抜け落ちたかのような直球の感想しか出てこないのが悔やまれる。

顔の両横に開かせ終えた彼女の手首を離すと、今度は自分の手が吸い寄せられるように身勝手におっぱいへと向かっていく。

「んっ……/// ああっ……///」

寝そべってなお半球を描くバストをなでまわす、この至福の手ざわり……。

むにゅっ、むにゅんっ、

見事な巨乳を思うさまモミモミと揉んでみたいと何度夢想したことだろう。

むぎゅんっ、と両手で寄せ集めるように握りしめると、かわいい乳首がこちらを向いて並ん

でいる。

「あっ……///あのっ……///」

先端に近づこうとするこちらの様子を察したのか、彼女が何かを言いかける。

／レロンっっっ！／

「あああっ……!♡」

ぴくん、と身体をしならせて声を上げる姿に今日一番の満足感が湧き上がる。

ちゅぱっ、れろんっ♡　ちゅぱ、ちゅっ、

無料版はここまで♡♡♡